

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | 龍南の變貌 |
| Author(s) | 五高創立七十周年記念会；高森，良人 |
| Citation | 龍南への郷愁：219-228 |
| Issue date | 1957-10-10 |
| Type | Book |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/10849 |
| Right | |

龍南への郷愁

二一八

三つとせ、南のお國は肥後の國

武光と清正の生れし地 (同)

四つとせ、良し惡し言ふ奴は野暮な奴

飲めや歌へやはね廻れ (同)

五つとせ、意氣は高鳴る血は躍る

龍南健兒の意氣を見よ (同)

六つとせ、無爲には過さぬ三年を

意氣は御國の寶なり (同)

七つとせ、泣いてはいけない氣が弱い

廿世紀に吼ゆる身は (同)

八つとせ、やさしい心もないじやない

黒い女にやほれられる (同)

九つとせ、此濱寄する大波は

カリフォルニアの岸をかむ (同)

十とせ、時は永劫常夏の

龍南健兒の意氣を見よ (同)

⑤ My wife, my wife, she is only sixteen,

beautiful, beautiful!

I love her, she loves me,

I will go home to see her.

Pleasant, Pleasant!

Meine Frau, meine Frau, sie ist nur sechzehn,

Schönest, schönest!

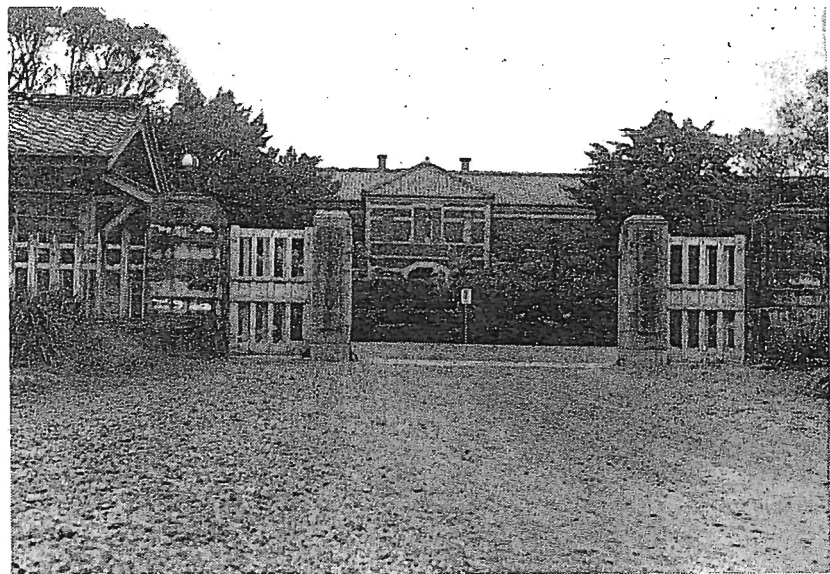
Ich liebe sie, Sie liebst mich,

Ich gehe nach Hause sie zu sehen,

Angenehm, Angenehm!

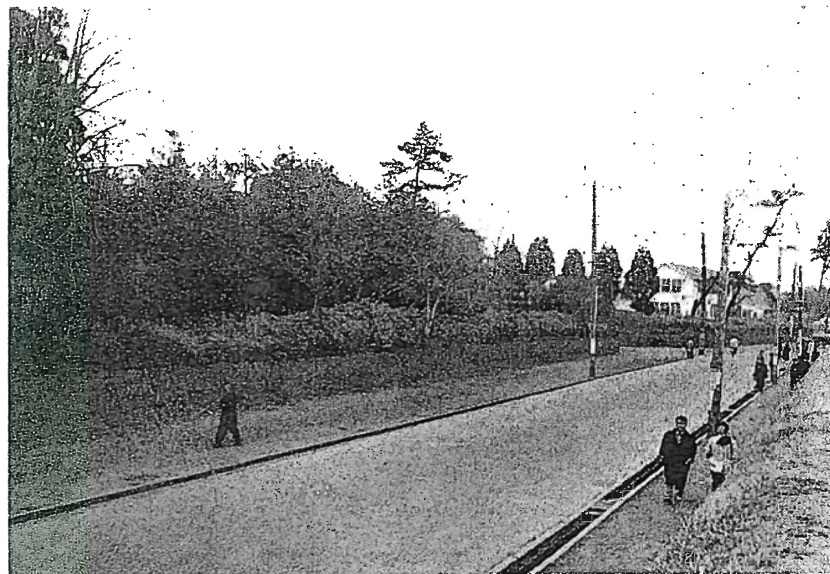
四、龍南の變貌

何處か小規模の大學からでも赴任した人ならば、境内が素晴らしく廣いのに驚く外は、格別變つた感想も浮ばないだらう。然るに、幸か、不幸か、筆者は、此處「西海の聖地」を巢立ち、遠く去つて天下の「赤門」に育まれ、莊子の所謂「鵝雛」を慕ひつつ九天に翔り、再び「練實」を求めつつ「梧桐」ならぬ桑梓に還つて來たが、時世の爲とは云ひながら、比年以來、日に月に變りゆく龍南の相貌が、衤衤と胸に逼つて來る。



中 門

に打たれながら、昨日今日のやうに、色鮮やかなものも、由つて來るところ、五十年史に書いた通り、魂を籠めて造つた爲である。然るに、ひとたび眼を左右に轉ずると、『十二境記』の『千代の林』が、それからでも六十年経つて居り、四十年前までは、亭亭として聳え、颯颯の響があつたのに、皮肉にも、濃緑の、大きな松から、枯れて行く。武夫原の南側に立つて眺めると、西側の土手の上には、小さな松が、ただ一株だけ寂しげに残つて居て、西山一帯が、手に取るやうに見える。北側にも、四五本残つて居るだけで、龍田山の全貌が、歴然として居る。さりながら、翠の松も今はなく、その上、上水道の第二貯水池開鑿のために、山肌があらはで、少くもここ十數年経たなければ、古の景致に達することは、恐らく困難だらう。ともあれ、五十年史執筆中、二三度は數へかかつたこともあるが、眼うつりがして、正確の數を得ずじまつた。五百前後までは、數へたやうに記憶するが、現在では、ざつと數へてみると、昔からの松は、百株前後しかなかった。よくも枯れたものだ。五高がなくなつたので、龍南人に親し



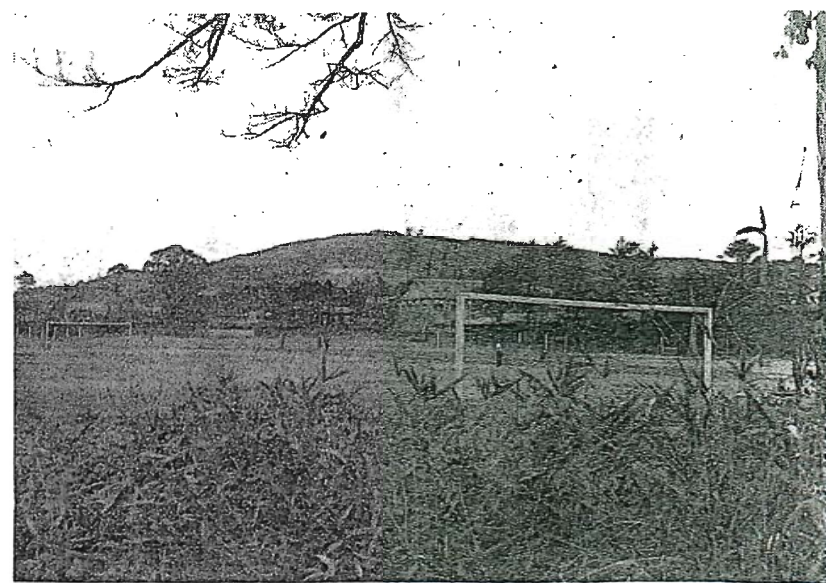
檜林の中はフル・右の建物は東光會館

大津街道沿ひの土手の上に、あれほど見事に榮えて居た、枝ぶりのいい松が姿を消して、榎や樺などの雑木が、わが世の春とばかり、それに代つて居ることが、先づ目に着く。『嚴めしき門』は、七十年この方、舊態依然として居るが、門を這入ると、すぐ右側には、二三年前に出來た、守衛の建物がある。東光原のことは、前項に、中門外、左側の植物園のことは、五十年史に、その來歴や品種まで、精しく記しておいた。今では、由緒ある蕃滋園（はじゑん）から移し植ゑられた樹々も、多くは枯れ、或は衰へ、地面は全く淺茅が原となつて居る。『秋季雜詠』の『苔青く』の句も、恐らく此の事と思はれる、比較的手入れの届いた、右側のそれと對蹠的になつて居るのも、五高との連がりだが、次第に薄れて行くやうな氣がしてならぬ。

左に『熊本大學法文學部』、右に『熊本大學理學部』の表札が掛けられて居る、中門から眺める車廻しは、誰が何と言はうと、學園では、天下一品。その中の蘇鐵だけは、さすがに年と共に枝をさして行く。本館の赤煉瓦が、七十年の雨風



武夫原より西山を望む



武夫原より龍田山を望む

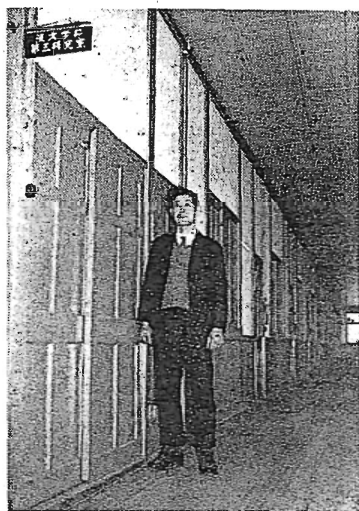
まれた松まで、五高に殉ずる氣にでもなつたらう、などと、噂されて居るのである。

十二境記から推して考へると、中門内の右側の高みには、「かたみの花木」があり、その中に小松を植ゑたといふことである。膝を浚する茅を押し分けて、標石を深して見たら、「裁ゑておくかたみの小松色そへよ學びの園の文のはやしに」の歌が、漢字ばかりで刻まれて居る。日付を見たら、昭和二年とある。三つ又の幹も枝も、可なり弱つて居るやうに思ひなされる。「黒本植」と姓名を記してあるのは、久しぶりの來校の記念だと聞いて居るが、當時の庶務課日誌も残つて居ないので、しかとは分らぬ。寮生も居なくなつた今では、そのゆかりを知つて居る人もないであらう。

五十年記念の頃は、「瑞邦」「済美」の二額は、寫眞にして、複製までされたのに、終戦後は、二面とも取り除かれてしまひ、瑞邦館や済美館の名も、今ではその意味もなくなり、それぞれ「合併教室」「體育館」と圖示され、體育館は、教育學部の所管となつて居る。柔・劍・弓道の道場が、森閑として居るのは、教練の無い武夫原と、同様である。理學部となり、教育學部となつて、校域の東部にも、いろいろの建物が出來たが、熊本大學史ならともかく、一一明記して置く必要もあるまい。ただ、講堂の北、化學階段教室の東に、三階建の熊本大學圖書館が近く竣功しようとして居る。階段教室も、何れは書庫の一部にでも充てられるであらう。

生徒集會所「終諧堂」に隣接して建てられた、五十年記念の「五高同窓會館」は、いろいろの都合で、この夏以來、その事務室も、事務所二階建の、元の教室に移り、階上は、理學部の教授會などに充てられ、階下は、三室とも、非常勤講師の宿所になつて居る。昨年からは、同窓會の總會も、祝宴も、學外で開かれて居るので、會館を使ふことは、近頃滅多にない。元の寮の一部であつた「知命堂」も、集會所の後方、會館の北東の松林の中に移改築中で、竣成の曉には、非常勤講師の宿舎に充てられるらしい。かくては、會館の用途も、將來果してどうなるやら、今のところ、見當もつかぬ。

玄關



元の第二寮階上（西側）



元の第三寮（左）と食堂（右）



左は元の知命堂、右は同窓會館

會館建設等のためには、小島・白壁兩教授と共に、遠く仙臺まで出かけ、各地同窓諸賢の醵金を乞うた経験ある筆者としては、一入感慨深いものがあるのである。熊本大學要覽の略圖には、單に、『記念館』と記されて居るくらゐだから、今にして誰かが、『五高同窓會館記』でも書いて置かないと、その來歴すら、忘られてしまふだらう。

本館に就いては、既に述べたので、ここには煩を避ける。元の習學寮の第一寮（南）は、前にも記したやうに、階上階下ともに、法文學部の第二研究室となつて、一室づつ、教官に充てられて居る。第二寮（中）は、階上階下ともに、中廊下を中心に、左半分は法文學部の、右半分並に第三寮は、教育學部の教官研究室に、第四寮は、階上を法科の研究室に、階下を法科演習室などに、食堂も改造されて、法科の合併教室に、炊事場や浴場・病室までも、全く面目を一新して、教育學部の教室に變つて居る。廊下も、室内も、靴ばきのままであることは、云ふまでもない。

因に、大學としての寄宿寮は、下立田の小磯橋の近くにあ

最後に、希望を一つ。近頃、「熊本大學を、“第八”國立大學へ」との言を耳にした。その意氣や、誠に壯とすべきだ。

五高の創立のために、少くも今の十億以上に相當する巨額を、地方税と有志の寄附によつて、しかも僅か二年間に支辦したことが、全く驚異に値することであつた。地方財政の窮屈な現今ではあるが、その點に於て、遠くは岡山・金澤・新潟、近くは山口・鹿児島等の各大學の創建に比して、優るとも劣らざるものであるか、どうか。學校當局に於ても、遠大なる抱負と、それが實現への熱意に於て、遺憾なしと言へるか、どうか。職員の一として、辱かしの極みである。先づ學校の内部が動き、縣・市の當局が動き、縣内外の全熊本人が呼應して、然る後文部省を動かして、大藏省を納得せしめ

六十餘年の間、天下の龍南を以て任じ、現在尙一萬の會員を有する、五高同窓會を代表して、敢て切望してやまぬ次第である。（昭和三十一年十二月三十一日）

前に挙げた、昭和二十五年三月末日現在の特別會員に就いて、今日（三十一年十二月末日）在職中の氏名を、學部別に列記すれば、

(○は同窓)

追記

| 氏名 | 學位 稱號 | 職名 | 擔任學科 |
|-------|----------|----|------|
| 大原英一 | 理博 | 教 | 化學 |
| 安達達三 | 理 | 助 | 物理學 |
| 稻葉三男 | 理 | 教 | 數學 |
| ○落合和夫 | 理 | 教 | 化學 |
| 小貫章 | 理 | 助 | 物理學 |
| 横田了 | 理 | 助 | 化學 |
| 中原勇 | 理 | 助 | 數學 |
| 佐々木四郎 | 理 | 助 | 數學 |
| 大久保武男 | 理博 | 教 | 數學 |

| | | | |
|-------|-------|---|-----|
| ○天野昌久 | 理 | 助 | 地學 |
| 山崎理 | 講 | | 化學 |
| ○池田一幸 | (非常勤) | | 天文 |
| 教育學部 | | | |
| ○竹原東二 | 文 | 教 | 心理學 |
| ○小山直之 | 文 | 教 | 教育學 |
| 金守新一 | | 助 | 體育 |
| 古川昌弘 | | 講 | 體育 |
| 工學部 | | | |
| ○山田恭介 | 理 | 助 | 熱工學 |

この外、大學になつて新任した人も少くないが、五高と直接關係がない人は、任命順職員録と同様、記さないことにした。而して同窓會と直接關係ある、法文學部に就いて云へば、高森・上田の二教授は、停年制に従つて、遠からず、相踵いで龍南を去ることになり、その後の五高出身は、昭和十四年就任の河原畑教授が、最古参となる。古稀を超えた老教授もあつた、五高時代に較べ、*「わかい世代」*と云ふより外はないのである。

参考

五、五高五十年史の總説

編纂の目的と記述の態度

第五高等學校五十年史の編纂は、何の爲に企てられたのであるか。有形に無形に、常に本校の現在に生きて、之を動かし、てゐるところの過去を再検討して、斷えず何等かの新計畫を樹立すべき未來に對して、適切妥當なる資料を提供せんとするに外ならぬ。然らば過去五十年間の記録なり遺物なりを、如何なる態度を以て叙述すべきであるか。編年體に依るべきか、記傳體に従ふべきか、史論體を採るべきか、抑々時代別と爲すべきか。本書は、その何れにも偏することなく、時代に大別したる後、他の三體を併用せんとするものである。

學制五十年史の六期
校史の前提と本校の四期

大正十一年文部省編纂の學制五十年史の如きは、學制頒布以前、即ち明治元年より同五年までを第一期とし、五年の頒布後同十二年教育令公布までを第二期とし、それより同十九年學校令公布までを第三期とし、該令公布後、同三十二・三年頃、その改正の必要を生じたまでを第四期とし、學校令改正後同四十年義務年限延長までを第五期とし、延長實施後大正十一年までを第六期とし、第六期を更に明治末年と大正とに分けてゐる。而して本校の歴史は、その第四期以後に相當するのであるが、學制中特殊の地位に在る高等學校は、稍々その趣を異にするので、明治元年以後學校令公布までを略述して、之が前提と爲し、同二十年、第五高等中學校創立以後同二十二年までを、第一期古城假校時代とし、二十二年九月、新校開校以後、同二十七年第五高等學校と改稱されるまでを、第二期新校開校後の第五高等中學時代とし、同二十七年改稱以後、大正七年現行制度制定までを、第三期第五高等學校前期と爲し、更に之を改稱以後同三十二年學校令改正前と、改正後同三十九年工學部分立までと、それより大正七年でとに分説し、大正七年以後現在までを、第四期第五高等學校後期と爲し、各時代に於て特筆すべき事を、なるべく年代順に記し、多數の正確なる資料に基いて、出來得る限り獨斷と曖昧とを避ける積りである。加之、凡百を網羅して、之を單に志料として貽すよりは、寧ろ一讀して本校の全貌を描いて貰ひたいと考へ、章節の如きもな